日本古代史研究のあり方
―基本的視点と方法論―

秋月耀

はじめに

日本の古代史に関する研究は、近年、著しく進展している。これらに触れ、古代日本の社会のあり方、集団・民族・国家の消長に関心を抱き、惹きつけられる。同時に、素朴な疑問や問題意識を抱く。基本的であるのに未解決な論点があまりに多すぎる、一般の社会常識や国際標準とあまりにかけ離れている等々。
勿論、巷間、関連する論考は、書籍、ウェブ・サイト等に溢れている。しかし、現状では、隔靴掻痒、最新の研究成果に基づく正鵠を射る見解に触れることも決して容易ではない。

歴史研究の究極の目的は、人間社会の本質を探求することである。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」である。基本的な論点・問題点を、等閑視、放擲、忌避するようでは、歴史研究の自己否定である。古代史研究も例外ではない。

古代史研究には、専門知識の蓄積とともに、歴史全体の流れ・枠組みを俯瞰することが求められる。いずれにおいても、一般社会通念、社会経験と共通する、バランスのとれた常識的な判断が前提となる。それには、基本的な視点、方法論等についてのコンセンサスが欠かせない。歴史の研究は、人文科学に属し、自然科学における科学的方法は直接適用されない。だが、過去の史料を評価・検証し、過去の事実の関連を追究する。また、あらゆる分野を統合することが欠かせない。特に、古代史の探究にあたっては、その前提として、基本的な視点、方法論等を確認することが必要である。重箱の隅をつつくのみの訓詁学は上げ足取り同然であり、歴史研究とは言えない。趣味的、唯我独尊的な珍説・奇説等も同様である。

本稿では、このような立場から、日本古代史の探究にあたり、国際標準ともいうべき基本的な視点、方法論等について問題提議するものである。その際、可能な場合には、抽象論を避け、具体的な論点・問題点を例示したい。

1. 基本的視点－国際標準

先ず、日本古代史の研究にあたっては、次のような国際標準とも言える視点が最低限必要とされる。

(1) 国際関係

何よりも、日本列島周辺地域の動向は欠かせない。日本古代史においては、大陸・半島との関係である。

日本人の祖先は、氷河期以降、大陸、あるいは、南方から渡来した。爾来、大陸・半島との関係は続いた。大和王権成立前後の時期も当然である。その影響は、稲作、土器等の生活レベルにはとどまらない。政治的動向の影響を等閑視することはできない。

【論点・問題点】
・日本人の形成については、「二重構造モデル」が通説とされている。即ち、氷河期に日本列島に渡来した集団が基層を形成した－縄文人である。氷河期後に、稲作を携えた集団が北部九州に渡来した－弥生人である。
・近時、大陸では長江文明の存在が確認されている。黄河文明よりはるかに古く、稲作発祥の地でもある。彼らは、黄河文明を築いた集団に圧迫され、各地に駆逐された。彼等の末裔が、日本列島に渡来したとの説も有力視されている。
・弥生人の起源、渡来ルートや長江文明との関係は、未だ確定していない。

【論点・問題点】
・「邪馬台国」当時、大陸は三国時代、戦乱の時代である。苛烈な戦闘と殺戮が常態化していた。大陸北東部は、魏・呉対立の第二戦線の様相を呈していた。江南に拠った呉は、北東部の高句麗、公孫氏との連携を図り、度々、派兵した。魏の後背を脅かすためである。
・魏は、公孫氏を討滅し、楽浪・帯方郡を回復した。この際の殺戮は凄まじい。魏の立場では、「倭国」についても、対呉戦略上から、冊封体制下に組み込むか、あるいは、半島と同様に扱うかである。
・この情勢の下、「倭国」側が、存亡に直結する危機感を抱いたことは当然である。「倭国」の朝献・遣使は、絶妙のタイミングで行われた。魏(司馬懿)の指嗾によるとする本場の専門家の説もある。

(2)政治権力との関係

日本古代史の核心は、大和王権成立の状況である。分立した小国家群が集約・統合され、権力が形成・確立される過程である。権力の動向を分析・評価することが不可欠である。

【論点・問題点】
・古代、権力を具現するものが統一した祭祀と先進的武器である。古代の日本では、青銅製祭器・墳丘墓と鉄製武器であった。
・祭器は土器等の生活容疑とは本質的に異なる。祭器の拡大は祭祀の拡大を、祭祀の拡大は権力の拡大、即ち、支配領域、あるいは、勢力圏の拡大を意味する。
・銅鐸、銅剣銅矛、銅鏡の分布は、明らかに、北九州、出雲、畿内の地域特性を示している。

これらの地域相互間の権力の変遷は明らかである。

当時の指導者・権力者の立場を追究しない限り、正鵠を射ることはできない。古代人の判断が稚拙であり、我々より劣るという先入観は禁物である。

【論点・問題点】

・銅鐸の起源を、北方の遊牧・牧畜民が使用した馬鈴である、とする説は根強い。

・当時も、半島と列島の往還・交流は盛んであった。この説では、「倭人」は、家畜用具であることを承知の上で、祭器に転用したことを意味する。

・春秋戦国時代、長江流域では、「鎛」や「銅鐃」が使用された。「鎛」は、重要な儀式で使われ、大きさの違う楽器を並べ音楽を奏でる「編鐘」を構成した。「銅鐃」は叩いて音を出す軍楽器で、味方を鼓舞し敵を威嚇した。

【論点・問題点】

・「邪馬台国」に関連して、『魏志倭人伝』によれば、魏から「倭国」に特使が派遣された。この特使については、多くの説が存在する。曰く、「銅鏡百枚や金印は事前に倭国側に渡した、「邪馬台国」に来なかった、「卑弥呼」は会わなかった、小人数で来た」

・このような作法は、現代の一般社会でも通用しない。まして、当時は戦時である。

【論点・問題点】

・法隆寺・五重塔の心柱材や正倉院の建材は、建設時より百年程古いとされている。

・法隆寺建立は。当時の政治・社会情勢の下、国家的大事業である。当時の権力者達が廃材・古材の転用を容認したということになる。年代測定法の適否以前の社会常識の問題である。

(3)軍事

権力は軍事と表裏一体である。「兵は国の大事なり。死生の地　存亡道　察せざる可からざるなり(孫氏)」は国際標準と言える。その分析・評価には、基礎的な軍事戦略、軍事知識が欠かせない。日本古代史の研究は、軍事常識抜きでは成り立ちえない。

【論点・問題点】

・有力説では、「邪馬台国」が発展拡大し、大和王権が成立したとされる。「邪馬台国」の所在地は畿内の大和地方ということにある。

・北九州地域は、魏・呉双方にとって、戦略上の要衝であった。魏にとって、北九州の地理的位置が重要であり、「倭人」「倭国」の存在ではない。辺境の大和地方等眼中にない。

・当時、魏王朝では、曹操の孫・明帝の下、曹一族と司馬懿が補佐していた。有力説では、彼等は、三国時代という極めて緊迫した情勢下においても、およそ戦略的に価値のない遠方に遙々特使を派遣したことになる。

古来、軍事力が権力確立の基盤であり、集団の消長を決する。現在進行中の事態然り。軍事お力は、戦力の質と量の相乗効果により発揮される。鉄器集団が石器・青銅器の集団によって制圧・滅亡に至った事例は、世界史上存在しない。双方が鉄製武器の場合、「寡兵 よく大軍を破る」も奇跡に近い。軍事の鉄則である。大和王権成立の過程も例外ではない。

【論点・問題点】

・鉄製武器の保有状況は、地域間の力関係を明確に示す。

・出土数は北九州が圧倒的である。出雲も、近時の発掘状況から、潜在力は無視し難い。

・他方、畿内・大和は、ある時期まで木製品中心であり、皆無に近い。木製棍棒と鉄器では勝負にならない。

【論点・問題点】

・半島の考古資料等によれば、「倭国・倭人」は、4・5世紀、半島で精鋭騎馬軍団を主力とした高句麗軍と激戦を繰り返した。爾後も、7世紀に至るまで、一定のプレゼンスを維持した。

・通説では、鉄の供給が不足し、出兵したとされる。極言すれば、鉄に乏しい集団が、鉄を取るために、鉄で武装した集団と戦い続けたということになる。

(4)自然環境との関係

古今東西、人類の生存を左右する最大の要因は自然環境である。古代、厳しい自然環境の下、集団は常に存亡の淵にあった。指導者にとって、集団と自己の生き残りのための戦いが全てであった。

特に、火山噴火等の大規模自然災害は、地球規模での異常気象をもたらす。伴う寒冷化、砂漠化等により、飢饉は必至である。民族大移動を誘発する。古来、多くの国家、文明が衰退・滅亡した。

【論点・問題点】

・紀元前3万年頃、姶良カルデラが大爆発し、九州は壊滅し、四国・中国に甚大な損害を及ぼした。これらの地域の、最初の住民(旧石器人)と後(縄文人)との関係については、精査は必要である。

・紀元前1万年前頃、北アメリカ大陸で天体(小惑星・彗星)が衝突・爆発した。氷河期から温暖化に向かう途中の一時的な寒冷期「ヤンガードリアス期」がもたらされた。北米大陸の巨大哺乳類の多くが絶滅し、当時の石器文化が終焉した。

・紀元前2千年頃、彗星が衝突した。当時、各地で栄えた古代文明ーエジプト古王朝、シュメル、インダス、長江文明等は、殆ど同時期に衰退・滅亡した。旧約聖書のソドムとゴモラの壊滅の故事は、当時の事実を描いたものとも言われる。

・181年タウポ火山(ニュージーランド)が、396年エトナ火山(シチリー)が大噴火した。東の漢、西のローマ帝国が崩壊し、数百年間破壊と殺戮が続いた。『魏志倭人伝』等の「倭国大

乱」は、この時期に勃発した。

2. 方法論－科学的思考

歴史研究とは、過去の史料を評価・検証し、過去の事実の関連を追究することと言える。人文科学の分野に属する。AI等の目覚ましい技術革新を背景に、あらゆる分野を総動員することが可能であり、必要である。

勿論、歴史研究は、自然科学と同様の要件を直接適用するには馴染まない。自然科学の分野では、科学的方法の要件－再現性と普遍性－が確立している。だが、歴史を研究するにあたっては、最低限の科学的思考は欠かせない。
日本古代史においても、方法論について、一般社会常識と共通する基本的なガイドラインが求められる。

(1)基本－妄想から科学へ

◎先ず、情報源が異なる複数の資料を総合的に分析・評価する。
　〇様々な資料源から収集された資料を、相互に検証し、取捨選択し、絞り込み、纏めあげる。
　〇単一資料だけでは、如何に深堀をしたとしても、確たる結論とはならない。
　〇物的資料(遺跡・遺物)を客観的に分析し、絞り込み、その上で、文献資料と相互検証する。
　〇国際標準となっている知見、方法論等は最大限尊重し活用する。
　〇考古資料、文献、神話・伝説等関連する全ての資料を対象とする。

◎先入観を前提にした、結論先にありきの立論は禁忌である。
　〇良いとこ取り、我田引水、牽強付会、御都合主義は、恣意的結論に陥る。
　〇最低限の確認作業を経ないような、自明、あるいは、唯一絶対の結論はあり得ない。
　〇社会常識上ありえないような主観的・恣意的・思い付き的な発想は極力控える。放談、漫談、妄想であり、相容れない。

以上から、総合的分析判断に基づく蓋然性を追求することが求められる。歴史研究では、いかなる精緻な作業を経たとしても、唯一の結論に到達しうる場合は稀である。解釈・判断が分かれ、複数の選択肢が生まれることは当然である。要するに、ビジネスにおけるマーケティング、戦略情報分析等と同様と言える。一般社会の常識である。

(2)考古資料

日本列島には、人類が移り住んだ以降、頻繁に巨大自然災害が襲来した。考古資料の破壊・滅失は計り知れない。特に、火山の大噴火により土壌が酸性化した。この酸性土壌により、人

骨、鉄器共に数百年で溶解・消滅する。これらが残存すること自体が奇跡に近い。

それでも、今なお、多くの貴重な考古資料が残存する。これらを検証することにより、当時の状況を解明する手掛かりとすることは当然である。日本古代史においては、歴史学と考古学は表裏一体である。残された考古資料により、政治・社会状況の動向の蓋然性を見出すことが必要であり可能である。日本古代史の研究は、考古資料の検証を捨象しては成り立たない。

日本列島では、多くの貴重な考古資料が残存する。考古資料の年代を測定する科学的な方法は未だ確立していない。絶対年代の設定は極めて難しい。だが、これらを検証することにより、当時の状況を解明する手掛かりとすることは必要である。

【論点・問題点】

・青銅製祭器として、北九州では銅鏡が、出雲以東では銅鐸が、重んじられた。

・銅鐸の分布地域は、中国から畿内大和以東へと拡大し、移動した。

・大和では、ある時期から旧来の銅鐸は放棄され、銅鏡が前方後円墳と共に採用された。爾後、この二つは大和王権の下、各地に広まった。銅鐸は、大和王権では全く継承されていない。

(3)文書資料

従来、歴史研究の対象は文献であった。これらの文書資料は、伝聞の集合体とも言える。文章化され、さらに、編纂される過程で、当事者・関係者・編纂者等の主観的意図が反映されることは自明である。

あくまで、考古資料等と相互検証し、総合的に分析・評価し、蓋然性を追求することが基本となる。

補強資料なしに、あるいは、相互検証抜きに、単独で、根拠資料とすることは禁忌である。結果的に、先入観、結論先にありき、良いとこ取り、牽強付会は不可避である。

蘊蓄を傾注した唯我独尊、願望あるいは義憤を込めた問題意識先走りも同様である。狭義の「文献批判」以前の問題である。

『魏志倭人伝』(『三国志』中の「魏書」第 30 巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称)

正史は、編纂時の政治状況を直接投影する公的政治文書である。大陸王朝の史記以下『二十四史』と日本の『古事記・日本書紀(記紀)』の双方に共通する。大陸王朝の正史は、新たな王朝による帝位簒奪を正当化するため、先の王朝の事績が記述された。

最も端的な例が『魏志倭人伝』である。編者・陳寿及び司馬懿との関係を念頭に置かなくてはならない。

【論点・問題点】

・『魏志倭人伝』は、魏から帝位を簒奪し成立した晋王朝の下で編纂された。魏王朝の不徳を糺すとともに、魏王朝での、晋の事実上の始祖たる司馬懿の業績を讃えている。
・司馬懿は、一連の軍事作戦に、指揮官として前線に赴いた。蜀の諸葛孔明とも対峙した－「死せる孔明、生ける仲達を走らす」。最大の功績が、後顧の憂いを絶った、遼東の公孫氏討滅である。司馬懿は、爾後、魏王朝の中で、熾烈な権力闘争を勝ち抜いた。
・「倭国(邪馬台国)」の女王「卑弥呼」による朝献・遣使は、これと時を同じくして行われた。司馬懿の徳と晋王朝の正当性を誇示する象徴であり、伏線であったとの説もある。
・『三国志』の編纂を命じられた陳寿は、魏に滅ぼされた蜀の人であった。

このような事情が『魏志倭人伝』の記述振りに直接投影されていることは当然である。陳寿にとって、一語一句に至るまで、忖度どころか、命懸けであった。編者が「邪馬台国・卑弥呼」がほぼ同時代であることを理由に、金科玉条視する説は、皮相的である。『魏志倭人伝』として独立して編集されているわけではない。本来は、『三国志』中の「魏書」第 30 巻烏丸鮮卑東夷伝の倭人条、つまり、倭人について記述されている部分にすぎない。逆に、偽書と同然視することも同様である。

『魏志倭人伝』の解釈をめぐっても、根本的な問題が存在する。いわゆる「原典の壁」である。
外国語の資料に対して、その言語を母語とする専門家の見解を傾聴すべきは、現実社会の鉄則である。原文は当時の言葉(漢語)である。我々が馴染んでいる漢文は日本語である。
正史は歴代王朝の政治史であると同時に、一級の文学作品であった。中国古典文学の約束事、先行文献等を的確に把握することは欠かせない。中国語を母語とする史学者・文学者・言語学者−による精査なしの解釈は、大きなリスクをはらんでいる。

【論点・問題点】
・『魏志倭人伝』は、二千文字程の漢字で構成されている。
・この部分の句読点について、日本で定本扱いされているもののと、中国側が学者を総動員した評点本では、に 100 カ所近くの異同が見られる。

【論点・問題点】
・「卑弥呼」の死についての記述「卑弥呼以死」は、「以て卑弥呼死す」とも解されている。
・これに基づき、「卑弥呼」の自死、賜死、さらには、日食、呪い、鎮魂のための大型墳墓築造等が導き出される。
・中国の専門家によれば、この「以」は「已」の同音同義語で、「すでに」の意味である。つまり、魏の特使が「倭国」についた時には、「卑弥呼」は既に他界していたことを言わんとしている。

『古事記・日本書紀』

『古事記・日本書紀(記紀)』も、本来、大和王朝による正史ともいうべきものである。『記紀』は大

和王権により編纂された最高度の政治文書である。自己の権威と正当性が誇示されていることは当然と言える。編纂時(7世紀初)の政治状況・権力者の政治的意図も直接投影されている。

『記紀』は、長年、精緻な文献批判の対象とされてきた。潤色・創作・造作・作為、さらには捏造等の集大成、あるいは、全くのフィクションであると見做す説は、未だに根強い。
上述(1.(2))政治・権力の視点等、歴史研究上の基本的な問題等は、殆ど、等閑視、乃至、放擲されている。

このような現状に対して、一般ビジネスの経験から、著しく不合理不自然で、社会常識に反すると、強い違和感、疑問を抱く一般人は多い。

【論点・問題点】

『記紀』の記述が歴史的事実に基づかない全くのフィクションであるとする場合、以下の諸点についての説明が必要である。

・数百年間の長期間と西日本から九州の広域に及ぶ時空を超えたフィクションを創造する作業が、当時、実務的に可能であったとする根拠
・出雲神話、神武東征等を神話として創作する根拠
・銅鐸・銅鏡等の青銅製祭器や鉄器の出土状況その他の考古資料との連関性
・異説が羅列されている背景

(4)神話・伝承

神話・伝説等も古代史研究の対象となりうる。旧約聖書やホメロスとシュリーマンの例を持ち出すまでもない。

同時に、文献以上に伝聞の集合体である。
先ず、永年の口伝の過程で、主として虐げられた庶民の願望が投影されている。いわゆる義経伝説、弘法大師にまつわる伝説が典型である。さらに、文章化の過程で、権力者の政治的意図も直接反映される。神社の由緒書に多い。
文書資料以上に、考古資料等の補強資料なしには、単独で、根拠資料とはなりえない。

終わりに

日本古代史に関しては、日本列島とその周辺地域に、今なお、実に多くの資料が残存している。世界的にも稀であり、奇跡に近い。それにもかかわらず、未だ解決されていない基本的論点があまりに多い。国際標準ともいうべき基本的な視点、方法論等により、再精査することが求められている。